



TITLE:

漢代の光祿勲：特に大夫を中心として

AUTHOR(S):

米田, 健志

CITATION:

米田, 健志. 漢代の光祿勲：特に大夫を中心として. 東洋史研究 1998, 57(2): 207-242

ISSUE DATE:

1998-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155205>

RIGHT:

東洋史研究

第五十七卷 第二號 平成十年九月發行

漢代の光祿勳

——特に大夫を中心として——

米 田 健 志

はじめに

第一章 光祿勳の大夫

第一節 起源

第二節 職掌

第三節 官秩と設置の沿革

第四節 機能

第五節 變遷

a、前漢前半期

b、前漢後半期

c、王莽時代および後漢

第二章 光祿勳

第一節 郎中令から光祿勳へ

第二節 光祿勳という名稱

第三節 光祿勳の機能

おわりに

はじめに

207

漢代の中央政府には、丞相・大司馬・御史大夫を頂點として、その下に太常・光祿勳・衛尉・太僕・廷尉・大鴻臚・宗正・大司農・少府・執金吾等の諸官署があり、政治の各方面を分擔していた。これらの官署の職掌については、『漢書』

百官公卿表や『續漢書』百官志に記されているが、その記述は概略的で、なお明らかでない点も多い。⁽¹⁾ 本稿で取り上げる光祿勳もその一つである。⁽²⁾

光祿勳の屬官のうち郎吏については、周知のように、嚴耕望および增淵龍夫兩氏の研究があり、⁽³⁾ 宮殿警護というその具體的な職掌もさることながら、郎選を通じて官僚の重要な供給源として機能していたことの重要性を論證されている。しかしながら、兩氏とも、郎吏と郎選の重要性を強調するあまりか、それが光祿勳の屬官であることの意義、逆に言えば、郎吏を擁する光祿勳という官署の漢代官僚機構における位置づけという問題については、やや等閑視されているかの如きである。

かかる觀點に立つて、本稿は、終局的には光祿勳の機能について考察せんとするものであるが、その前に、いま少し明らかにすべき問題が残されている。すなわち、光祿勳の屬官には、郎吏のほかに大夫と謁者があったが、このうち大夫は、その官位は郎吏より高く、またその職掌上、漢代獨自の集議政治とも密接な關係を有しており、大夫についての考察無くしては、光祿勳の機能を明らかにするのは、少々困難だと思われる。しかし、現在この大夫については專論と呼べるほどの研究がなく、⁽⁴⁾ これが本稿において、光祿勳の大夫を中心として考察しようとする理由である。⁽⁵⁾

第一章 光祿勳の大夫

第一節 起 源

大夫については、『漢書』卷一九上百官公卿表上（以下、百官表と略稱）には、

郎中令は秦官、宮殿掖門戸を掌る、丞あり。武帝太功元年（前一〇四）名を更めて光祿勳となす。屬官に大夫・郎・謁者あり、皆な秦官。……大夫は論議を掌る。

と、大夫が「論議を掌る」官であること、その起源が秦代に遡ることが記される。しかし、本来大夫とは「論議を掌る」官の名稱ではなく、西周晚期に現れた稱謂で、春秋時代においては、王・諸侯・卿・大夫・士・庶人よりなる身分制度のうちの一階級を意味した⁽⁶⁾。では、如何なる経緯により秦漢時代の「論議を掌る」官が、大夫と名づけられたのであろうか。

戦國時代には、身分に係る稱謂ではなく、官名としての大夫の例が現れる。例えば、『呂氏春秋』には四監大夫なる官名がみえる⁽⁷⁾。また、楚には三閭大夫なる官があり、これは王族の昭・屈・景三氏を掌る、秦漢時代の宗正の如き官で、かの屈原が任じられている⁽⁸⁾。さらに、秦には宮中において文書を掌る官として、御史大夫があった⁽⁹⁾。これらは、いずれも大夫の身分にある者が一定の職務に従事することで、大夫が官職名として固定したものと考えられる。そして同様に、論議を専門とする大夫も存在した。『史記』卷四六田齊世家には、戦國中期的のこととして、次のように云う。

宣王は文學游説の士を喜み、騶衍・淳于髡・田駢・接予・慎到・環淵の如きの徒より七十六人、皆な列第を賜い、上大夫となり、治めずして議論す。是を以て齊の稷下の學士復た盛んにして、數百千人に且し⁽¹⁰⁾。

稷下の學士については、降って『鹽鐵論』論儒篇にも、

齊の宣王は儒を褒め學を尊び、孟軻・淳于髡の徒は上大夫の祿を受け、職に任ぜずして國事を論ず。蓋し齊の稷下の先生は千有餘人ならんか。

とある。ここで「治めずして議論す」「職に任ぜずして國事を論ず」というのは、稷下の學士達が、行政・軍事等に關わる一定の職掌を持たず、専ら政治についての議論のみをしていたことを示す。これは、「論議を掌る」漢代の大夫の起源とみて良いだろう。ただし、ここに「上大夫」とあるのは、未だ身分呼稱で、官名として固定してはいなかったようである⁽¹⁰⁾。

しかし、さらに降った戦國末期の秦には中大夫令なる官が存在した⁽¹¹⁾。百官表に「大夫は秦官」とある太中大夫・中大

は、秦代には、漢代と同じく官職として固定し、この中大夫令に屬していたと考えられる。⁽¹²⁾ 中大夫・中大夫令の「中」とは、上中下の中ではなく、宮中を意味しており、大夫が宮中において王に近侍していたことを示す。⁽¹³⁾

この秦の大夫と、稷下の學士とを比較すると、二つの點で注目される。第一に、稷下の學士が、いわば食客として上大夫の身分を與えられただけに對して、秦の大夫は定制化された官職であることで、これは、戰國中期以降に急速に進んだ官僚制の整備・強化⁽¹⁴⁾に對應するものである。第二に、稷下の學士が、齊の國都臨淄の城門附近に居たのに對して、秦の大夫が、宮中に近侍する、王により身近な存在となったことである。王にとって、顧問となる人材を宮中で常以待機させておくことは、その君權強化に大いに効果があつたと思われる。⁽¹⁶⁾

第二節 職 掌

大夫の具體的な職掌については、すでに先行研究において論じられている點が多いので、ここではごく簡単に述べるにとどめる。

百官表には「大夫は論議を掌る」と簡略に記されるが、『續漢書』百官志二（以下、百官志と略稱）には、

凡そ大夫・議郎は皆な顧問應對を掌る。常事無く、唯だ詔令の使用する所なり。凡そ諸國の嗣の喪は、則ち光祿大夫弔を掌る。

とある。まず「顧問應對」とは、皇帝の諮問に應えたり助言したりすることで、時に具體的な政策立案も行つた。後述するように、特に前漢前半においては、大夫が廣範圍にわたる様々な問題について、皇帝のブレイントラストとして関わっていたことがみてとれる。⁽¹⁷⁾

また、大夫は集議に参加する資格を有していた。⁽¹⁸⁾ 例えば、『漢書』卷六四上主父偃傳には、主父偃によってなされた朔方郡設置の建言について、

上（＝武帝）その説を覽、公卿に下し讓せしむも、皆な不便なるを言う。公孫弘曰く、秦時嘗て三十萬の衆を發し北河に築くも、終に就すべからず。已めて之を棄てよ、と。（中大夫）朱買臣は弘を難誦し、遂に朔方を置く。

とあり、この時に、集議において公孫弘ら群臣の反對意見を論破したのが、恐らくは武帝の内意を受けた中大夫朱買臣であつた。百官表に「大夫は論議を掌る」とあるのは、このように大夫が集議での議論に参加したことをいっただものである。ただし、集議はその本質として皇帝の諮問機關の域を出ることはなく、大夫の集議参加は、廣い意味で「顧問應對」に含まれるといつてよい。結局、大夫の職掌としては、ブレンントラストとしての皇帝の諮問に應えることが、まず第一に擧げられる。

大夫には皇帝の使者としての職務もあつた。⁽¹⁹⁾百官志は「凡そ諸國の嗣の喪は則ち光祿大夫、弔を掌る」とするが、『漢書』卷六八霍光傳に、

光薨じ、上（＝宣帝）および皇太后は親しく光の喪に臨む。太中大夫任宣は侍御史五人とともに節を持し喪事を護す。とあるように、「諸國の嗣」以外にも霍光の如き功臣の場合においては、大夫が葬儀を監督することがあつた。さらに、葬儀以外にも、國內外に大夫が使者として派遣される例がある。『後漢書』傳一六伏隆傳には、

時（＝建武二年）に、張歩兄弟は各々彊兵を擁し、據りて齊地を有つ。隆を拜して太中大夫となし、節を持し青徐二州に使いし、郡國を招降せしむ。

とあり、使者として派遣するために、伏隆を太中大夫に任命したことがわかる。⁽²⁰⁾また、百官表には、

西域都護は加官。宣帝地節二年（前六八）初めて置く。騎都尉・諫大夫を以て西域三十六國を護せしむ。

とあるが、西域都護は使、西域都護と呼ばれることもあり、使者としての性格を持つ官であつた。⁽²¹⁾このような諫大夫への西域都護の加官や、霍光の葬儀を監督した太中大夫任宣が、使者の證たる節を持していたことなど、いずれも、大夫の使者としての職掌の範圍内にあることと言えよう。⁽²²⁾

以上、大夫の具體的な職掌としては、皇帝のブレントラストおよび使者という二つがあったが、これらはいずれも、皇帝の命令があつて初めて生じる職務であり、命令のない限り、大夫は宮中にて待機していたのである。百官志に「常事無く、唯だ詔令の使用する所なり」と言うのは、このことを示し、大夫の職掌が未分化な状態にあつたことを物語っている。

第三節 官秩と設置の沿革

漢代において官位の上下を表すのは、上は萬石・中二千石から下は百石・斗食に至るまで、十數等に分かれた官秩であつた。しかし、百官表・百官志をみる限り、大夫についてはその官秩が明確でない場合がある。以下では、大夫の官秩を明らかにし、あわせてその設置の沿革を跡づけたい。

前漢の大夫の官秩・沿革については、百官表に次のようにある。

太中大夫・中大夫・諫大夫あり、皆な員無く、多きは數十人に至る。武帝元狩五年（前一八）初めて諫大夫を置く、秩は比八百石。太初元年（前一〇四）名を更めて中大夫を光祿大夫となす、秩は比二千石。太中大夫は、秩は比千石、故の如し。

これによると、漢初には太中大夫と中大夫のみが存在し、元狩五年に秩比八百石の諫大夫が設置された。太初元年に郎中令が光祿勳と改稱されたのに伴い、中大夫は秩比二千石の光祿大夫に改められた。また、太中大夫の官秩は太初元年以降も、それ以前と同様に比千石であつた。

ところで、光祿大夫と改められる以前の、中大夫の官秩は何石か。『漢書』卷四文帝紀後六年條で顔師古は、

中大夫は郎中令の屬官、秩比二千石。

と注すが、これは誤りであろう。百官表には「太中大夫・中大夫・諫大夫」の順に記されており、これは三大夫の序列を

示していると考えられる。⁽²³⁾ 従って中大夫の官秩は、太中大夫の比千石未満、諫大夫の比八百石以上となる。さらに、光祿勳の屬官の官秩は、一部の例外を除いて、多くが比幾石であること、および漢代には九百石の官秩が存在しなかった可能性が高いことから、⁽²⁴⁾ 中大夫の官秩は比八百石だったとするのが、妥當なところであろう。⁽²⁵⁾

また、諫大夫の官秩は、當初は比八百石だったが、成帝陽朔二年（前二三）に八百石と五百石の官秩が廢止され、それぞれ六百石と四百石に吸收されたのに伴い、比六百石に改められたと思われる。⁽²⁶⁾

後漢の大夫については百官志二に記されている。

光祿大夫は比二千石。本注に曰く、員無し。……太中大夫は千石。本注に曰く、員無し。中散大夫は六百石。本注に曰く、員無し。諫議大夫は六百石。本注に曰く、員無し。

ところが、この條の劉昭注補に引く『漢官』、および『續漢書』輿服志下劉昭注補の引く『東觀書』（『東觀漢記』）には、それぞれ全く異なる數字が記されている（表1参照）。『漢官』については詳細は不明だが、後漢以前の成書は確實で、⁽²⁷⁾ その意味では晉代成書の『續漢書』百官志よりは信憑性が高いとは言える。しかし、後漢中期成書の『東觀漢記』は、少々問題となろう。果たしていずれの數字が正しいのだろうか。

まず、『東觀漢記』だが、この條冒頭に「建武元年云々」とあり、各官職の官秩を列擧する中に、建武年間に省かれた郡都尉や丞相司直等についての記載があることから、おそらく、ここに記された大夫の官秩も、建武初年の僅かな一時期の舊制を述べたものと思われる。光武帝の時には何度かの官制改變があり、その間、大夫の官秩にも變更があった可能性は否定できない。⁽²⁸⁾ 以下、論點を『續漢書』百官志と『漢官』との比較にしぼることにする。

まず、光祿大夫の官秩については、『漢官』も異説を立てないから、比二千石でよいと考えられる。

ついで太中大夫だが、その官位の上下を窺わせる史料を『後漢書』中に求めると、まず列傳四四楊秉傳には、

表1 後漢の大夫の官秩についての諸書の異同

	光祿大夫	太中大夫	中散大夫	諫議大夫
『東觀漢記』（『續漢書』輿服志注所引）	二〇〇〇	比二〇〇〇		六〇〇
『續漢書』百官志一	比二〇〇〇 無員	一〇〇〇 無員	六〇〇 無員	六〇〇 無員
『漢官』（『續漢書』百官志二注所引）	三人	比二〇〇〇 二〇〇人	比二〇〇〇 三〇〇人	三〇人
『宋書』百官志	三人	二〇人 ⁽¹⁾	三〇人	
『齊職儀』（『初學記』卷十二所引）				三〇人
『通典』職官典	三人 ⁽²⁾	二〇人 ⁽³⁾	三〇人 ⁽⁴⁾	無員 ⁽⁵⁾

* 各欄の右側が官秩、左側が員數。

* * — は、その項目について記載のないもの。

(1)もと「中大夫」に作るが、「太」の誤脱と思われる。

(2)職官典十六による。

(3)同右。

(4)同右。

(5)職官典三による。

（乘）任城相に還る、……桓帝即位し、尚書に明らかなるを以て徵されて入りて講を勧め、太中大夫を拜す。
とあり、列傳一五劉寬傳には、

（寬）南陽太守に遷り、三郡を典歷す。……人々德に感じ行を興し、日々に化する所あり。靈帝初め、徵されて太中大夫を拜す。

とあり、列傳五五段熲傳には、

（熲）復た司隸校尉となり、數歲にして、潁川太守に轉じ、徵されて太中大夫を拜す。

と、靈帝時代の段頻の官歴を記す。この三名は、いずれも秩二千石の郡國守相から太中大夫に遷っているが、いずれも左遷された様子はなく、むしろ地方から中央への榮轉とみてよい。桓靈期と時代が降る例のみで、少々難があるが、少なくとも後漢後半には太中大夫の地位は郡國守相とほぼ同等であり、その官秩は、百官志にいう千石ではなく、『漢官』にいうように比二千石だったと考えるべきである。

中散大夫の官秩も、『漢官』にいうように比二千石だったと思われる。『宋書』卷三九百官志上には、

中散大夫は王莽の置く所なり、後漢はこれに因る。
と云う。王莽は、その官制改革において比二千石を「中大夫」と改稱しており、中散大夫は、「中大夫⁽²⁹⁾比二千石」の散

閑なるものという意味で命名・設置されたのであろう。⁽³⁰⁾後漢の中散大夫は、これを繼承したものであり、その官秩はやはり比二千石だったと考えられる。

諫議大夫の官秩については、『漢官』も異説を立てないが如何だろうか。『後漢書』列傳四一陳禪傳には、安帝の時に陳禪が、

左馮翊に遷り、入りて諫議大夫を拜す。

とあるが、諫議大夫が、百官志にいうように秩六百石であれば、これは左遷人事ということになるが、この記事からは、そのような様子は窺えない。また、『續漢書』百官志五には次のような記事がある。

舊は列侯奉朝請の長安に在る者は、位は三公に次ぐ。中興以來、唯だ功德を以て位特進を賜う者は、車騎將軍に次ぐ。位朝侯を賜う者は、五校尉に次ぐ。位侍祠侯を賜う者は、大夫に次ぐ。その他の肺附及び公主の子孫たるを以て墳墓を京都に奉ずる者は、また時に隨い見會し、位は博士・議郎の下にあり。

ここでは、三公・車騎將軍・五校尉・博士・議郎とともに、大夫が列侯の位の上下を表す際の基準とされているが、⁽³¹⁾この大夫とは、光祿・太中・中散・諫議の四大夫を一括していったものであろう。同様の例は、百官志二の劉昭注補にもみえ

る。

胡廣曰く、……此の四等（筆者注。光祿・太中・中散・諫議の四大夫のこと）は、古においては皆な天子の下大夫たりて、列國の上卿に視せらる。

従つて、諫議大夫の官秩も、他の三大夫と同等の比二千石だったのである。『漢書』卷九九中王莽傳中には、王莽による篡奪に伴う、漢の宗室劉氏の處遇について、

諸劉の郡守たるものは、皆な徙して諫大夫となす。

とあるが、ここで「徙」には、同等の官職間の異動という意味があると思われ、これより、王莽時代の諫大夫の官秩は、郡太守とはほぼ同等の比二千石だったと考えられる。後漢は、この秩比二千石の諫大夫を繼承し、諫議大夫と改稱したのである。⁽³³⁾

以上より、後漢の大夫の官秩は、光祿・太中・中散・諫議のいずれも比二千石だった、との卑見を提出しておくこととする。また、その員數については、後世の百官志や政書類は、多く『漢官』の數字に従っており（表1参照）、他に徴すべき材料もなく、筆者もこれに従いたい。

第四節 機能

前節までは、主として百官表・百官志を用いて大夫の職掌・官秩をみてきたが、これだけでは、漢代の官僚機構における大夫の果たす機能は明らかにし得ない。

大夫という官職の性格を知る上で注目すべきは、『漢書』卷六四上嚴助傳の次の記事である。

對策するもの百餘人、武帝は助の對を善しとし、是れより獨り助を擢んで中大夫となす。後に朱買臣・吾丘壽王・司馬相如・主父偃・徐樂・嚴安・東方朔・枚皋・膠倉・終軍・嚴葱奇等を得、並びに左右に在り。……上（＝武帝）

は助等をして大臣と辯論せしめ、中外は相應するに義理の文を以てす（注。師古曰く、中は天子の賓客を謂う、嚴助の若きの輩なり、外は公卿大夫を謂うなり）。

顔師古によると、嚴助・朱買臣・吾丘壽王等、主として大夫もしくは郎中の官を與えられて武帝に近侍した者たちは、「天子の賓客」とされ、朝廷の大臣達とは區別されている。⁽³⁴⁾この「客」とは、戰國時代から漢初の高祖集團に至るまでしばしば現れる語だが、要するに、主家に寄食し、主人との間に、人格的信賴に基づく私的な主従關係を結んだ者の謂いである。すなわち、嚴助等は「客」として、武帝との間に私的な主従關係を結んだ家臣たる性格を有していたのである。このことは、『漢書』卷七十二貢禹傳に、

（貢）禹上書して曰く、……（禹）拜されて諫大夫となり、秩は八百石、奉錢は月に九千二百。食を太官より廩け

（注。師古曰く、太官その食を給するを謂う）、又た四時の雜繒・繡絮・衣服・酒肉・諸果物を賞賜するを蒙る、徳厚は甚だ深し。

とあることから一層明らかとなる。「食を太官より廩け」とは、大夫の日常の食餌が、少府所屬の太官令から支給されたことを意味するが、少府は、言うまでもなく皇帝の私的財政を掌る官署であり、⁽³⁵⁾大夫が皇帝の私臣たることを極めて具體的に示すだろう。

また、『漢書』卷八二王商傳に、

商は相を免ぜられて三日にして、病を發し歟血し薨ず、諡して戾侯と曰う。商の子弟親屬の附馬都尉・侍中・中常侍・諸曹・大夫・郎吏たる者は、皆な出て吏に補せられ、留りて給事・宿衛するを得る者莫し。

とあるように、大夫は、やはり皇帝の私臣たる郎吏等と同じく、日常、宮殿内に宿衛していた。大夫が宿衛していたのは、武帝時代には、未央宮内の承明廡であり、⁽³⁶⁾前漢末哀帝の頃には、やはり未央宮内にある高門殿であった。⁽³⁷⁾

このように大夫は、皇帝の私的な家臣であること、日常的に宮殿内に宿衛していたことなど、同じ光祿勳の屬官たる郎

吏と酷似しているが、大夫が「貯才池」、官僚豫備員たる性格を持つことも、郎吏と同様であった。『漢書』卷七八蕭望之傳には、

是の時（＝宣帝時）、博士・諫大夫の政事に通じたる者を選びて、郡國の守相に補す。

とあるが、これは、宣帝時代の諫大夫に限ったことではなく、前漢において大夫に就任した者の多くは、やがては郡國守相や中央の二千石以上の高官へと昇進していったのである（末尾表2参照）。

さて、かく官僚豫備員たる性格を有する大夫への補任は、具體的にはどのように爲されたのだろうか。第一に、賢良・方正等の制科に擧げられることがある。『漢書』卷四九鼂錯傳に、

有司に詔して賢良文學の士を擧げしむるに、錯は選中に在り、……對策する者は百餘人、唯だ錯のみ高第となり、是れより中大夫に遷る。

とあり、『漢書』卷八六王嘉傳に、

敦朴能直言に擧げられ、召されて宣室に見え、政事の得失を對え、超えて太中大夫に遷る。

とあるのが、その例である。第二に、州より茂材に擧げられることがある。衛宏『漢舊儀』には、

刺史は民の茂材あるを擧げ、名を丞相に移す。丞相は考召し、明經一科・明律令一科・能治劇一科、各々一人を取る。詔もて諫大夫・議郎・博士・諸侯王傳・僕射・郎中令を選ぶには、明經を取る。

と記される。ただし、この方法によって諫大夫となった實例は見あたらない。これに限らず、『漢書』『後漢書』に記録のある二百名以上の大夫のうち、大夫補任の理由・狀況が示される例は、残念ながらごく僅かであり、明らかでない部分の方が多い。

しかし、ともあれ、これらの例から、前漢時代における官僚の昇進に、制科對策・州擧茂材→大夫→郡國守相・二千石という一つの徑路が存在したことが明らかとなろう。

福井重雅氏の研究によれば、漢代の官僚は、その官秩によって、百石以下・斗食等の最下級官秩層、比二百石から四百石までの下級官秩層、比六百石から千石までの上級官秩層、そして比二千石以上の最高官秩層の四クラスに分かれており、特に、百石と比二百石の間、四百石と比六百石の間には、厳然たる區別が存在したとされる。⁽³⁸⁾このうち、百石と二百石の間の關門を越えるための重要な方途の一つが郎選、すなわち郎吏への就任であることは、すでに永田英正氏が指摘されている。⁽³⁹⁾

ここで筆者は、いま一つの四百石から比六百石の間の、福井氏のいう「官吏の立身出世を判別する、いわば基本的な境界線」を越えるための重要な方途の一つが、大夫補任だったと考えるのである（末尾表3参照）。前漢の大夫の官秩は、最低の諫大夫でも比八百石（陽朔二年以降においても比六百石）であり、大夫に任じられることは、自動的に、この境界線を越えることを意味する。すなわち、漢代の官僚はそのキャリアにおいて、まず光祿勳屬下の郎吏に補任されることで、第一の關門を越え、ついで同じく光祿勳屬下の大夫に就任することで、第二の關門を越えて、二千石クラスの高位高官へと昇進して行くのである。⁽⁴⁰⁾

なお、附言しておけば、既に比六百石以上の官に在るもの、例えば、縣令や刺史が太中大夫や諫大夫に遷ることもあり、この場合そこには、第二の關門を越えるという意義は附随しない。しかし、大夫として皇帝に近従し、皇帝から直にその能力を認められる機会を持つことには、やはり、官僚のキャリアにおいて重要な意味があると考えてよい。この點も、郎吏と同様である。

また、大夫のうち光祿大夫は、比二千石という官秩の高さと皇帝に近侍し得るという點から、官職と爵位の違いはあれ、列侯に準ずる性格を有していた。⁽⁴¹⁾かかる光祿大夫のいわば名譽職的な性格は、時代が降るにつれ顯著になってゆく。

第五節 變遷

前節までは、漢代の大夫の職掌・機能について考察してきたが、一口に漢代と言っても、王莽の篡奪を挟んで前後四百年以上あり、この間に官僚機構も大きく變化した。當然、大夫という官職の性格も變化したはずである。以下では、この四百年間を便宜的に三期に分かつて、大夫に就任した者の事績を個別的に取り上げること、大夫という官職の變遷を追うことにする。

a、前漢前半期

まずは、漢初から、中央集權的な官僚機構がほぼ整備された武帝時代まで。周知のように、當時の漢の中央政府の重要な課題として、諸侯王勢力の削減があった。『漢書』卷一四諸侯王表序には、

文帝は賈生の議を采りて、齊・趙を分かち、景帝は鼂錯の計を用いて、吳・楚を削る。武帝は主父の冊を施きて、推恩の令を下し、諸侯王をして戶邑を分かち以て子弟を封ずるを得せしめ、黜陟を行わずして、藩國は自ずと析^{わか}かる。

とあり、漢初における諸侯王問題が、賈誼・鼂錯・主父偃等の獻策により解決を見たことが簡潔に記されているが、獻策が行われたのが、それぞれ、賈誼が太中大夫、鼂錯と主父偃が中大夫に在任していた時であったことは、注目に値する。⁽⁴²⁾

また、文帝・景帝時代、中央政府内部においては、建國の功臣及びその子孫が、或いは公卿に任命され、或いは列侯に封じられることで朝廷に在位し、その權勢を背景に皇帝との間に確執を生じがちであった。このため皇帝は、政府に對して充分な指導力を發揮できずにいたが、この問題に對しても、太中大夫賈誼が列侯就國令を立案するなど、皇帝の政府への支配權を強化しようとした。また、中大夫鼂錯も、「諸の大功臣は錯を好まざるもの多し」（鼂錯傳）と、功臣たる公卿達と對立していたが、これもおそらく皇帝の側に立って、彼らの勢力を削ぐうとしたからであろう。

武帝初期にも、暫くは公卿、特に外戚の勢力の強い時期が続いた。この頃、建元三年（前一三八）の閼越と東甌の紛争について、『漢書』卷六四上嚴助傳には、不介入を主張する外戚の太尉田蚡に對して、中大夫嚴助がこれを激しく論難し、武帝に出兵を決意させたことが記されている。⁽⁴³⁾先に引いた『漢書』嚴助傳・主父偃傳にも、武帝が大夫を以て自らの代理として、集議の場において政府の公卿達と論議させ、その意志を政策に反映させるという政治手法を採っていたことが示されている。永田英正氏は、大夫が集議に参加するようになるのは、この武帝時代であるとされる。

右のような過程を経て、皇帝の政府に對する支配權は徐々に強化されたが、これを制度の側面から支えるために、同時に法令の整備も行われた。賈誼傳に「諸法令の更定する所……、皆な誼よりこれを發す」とあり、鼂錯傳に「法令の更定すべきを言い、書すること凡そ三十篇」とあるのが、それである。武帝時代には、太中大夫張湯と同じく太中大夫趙禹が、共同して律令改定に當たっている。『漢書』卷五九張湯傳に、

（湯）太中大夫に遷り、趙禹と共に諸律令を定む、務めは深文もて守職の吏を拘するに在り。

とあることから、その目的が、官僚への統制を強化し、皇帝の政府に對する支配權を確固たるものにするためだったと分かる。⁽⁴⁴⁾こうした法令整備も、また大夫によって進められたのであった。

以上、前漢武帝以前の大夫の活動を要約すると、大夫は、その權力強化を望んだ歴代皇帝にとって、最も有能な協力者であり、大夫のブレイントラストとしての機能は、この時期、最も際だっていたと言える。

なお、附言するなら、この時期の全ての大夫が、有能なブレイントラストとして活動していたわけではない、例えば、文帝時代の太中大夫石奮や、武帝時代の太中大夫衛青等は、ともに皇帝に親近なるを以て大夫に任じられた者で、兩者とも學問の無い人物であった。⁽⁴⁵⁾これらは、大夫の官僚豫備員としての機能によるもので、彼らは後にそれぞれ太子太傅・車騎將軍という顯官へと昇進している。

無論、鼂錯や張湯・趙禹等も、後に中央・地方の二千石クラスの高官に昇進しており、ブレイントラストとしての機能

が際だっていたというのも、あくまで他の時期との比較の問題である。時代の變化に對應して、大夫という職掌未分化な官職の、どの側面が最も表に現れたかという點を考えるのが、本節の目的である。

b、前漢後半期

前漢の後半期には大夫の機能に變化がみられる。まずは、宣帝時代の光祿大夫于定國と太中大夫張敞の例を擧げよう。

宣帝立ちて、大將軍（霍）光は尙書の事を領し、羣臣の昌邑王を諫む者を條奏し皆な超遷せしむ。定國これより光祿大夫となりて、尙書の事を平^{つかにと}り、甚だ任用さる。

（『漢書』卷七一于定國傳）

宣帝は（張）敞を徵して太中大夫となし、于定國と並びて尙書の事を平^{つかにと}らしむ、違を正すを以て大將軍霍光に忤^{さか}う。

（『漢書』卷七六張敞傳）

于定國と張敞が、「平尙書事」として宣帝の信任を受けていたことがわかる。ついで、『漢書』卷三六劉向傳にみえる元帝時代の事例である。

元帝初めて即位し、太傅蕭望之を前將軍となし、少傅周堪を諸吏光祿大夫となす。皆な尙書の事を領し、甚だ尊任せらる。

また、同じく劉向傳には、やや後のこととして、

（元帝）周堪を擢んで光祿勳となし、堪の弟子張猛は光祿大夫・給事中となし、大いに信任せらる。

とあり、周堪・張猛の師弟が、それぞれ光祿大夫として元帝に信任されたことが記されている。次の成帝時代の例としては『漢書』卷一〇〇上敍傳上の次の記事がある。

是の時（＝成帝時）、許商は少府たり、師丹は光祿勳たり。上はここに於いて商・丹を引きて入りて光祿大夫となし、

（班）伯は水衡都尉に遷り、兩師と並びて侍中たり（注。如淳曰く、兩師とは許商・師丹なり）、皆な秩は中二千石。

東宮に朝する毎に、常に従い、大政あるに及びては、俱に公卿に諭指せしむ。

許商・師丹は、それぞれ少府・光祿勳から光祿大夫・侍中となり、成帝の信任を受け、公卿を指導する立場にあった。

これらの例に共通しているのは、單に大夫たるによって重用されたのではなく、侍中・給事中・諸吏等を加官された内朝官であるか、領(平)尙書事であるか、もしくはその兩方であつたという點である。これは、哀帝時代に、諫大夫として宮中高門殿に待機していた鮑宣の、次の上奏文からも一層明らかとなる。

高門は省戸を去ること數十歩なるも、見えんと求めて出入すること二年なるも未だ省りみられず。海瀕の仄陋をして自ら通ぜしめんと欲するも、遠し。願くは數刻の閒を賜い、習習の思いを極め竭くさば、退きて三泉に入るも、死して恨む所亡し。
 (『漢書』卷七十二鮑宣傳)

すなわち、諫大夫鮑宣は、内朝官でも領尙書事でもないために、皇帝に謁見する機會を持たず、ひいては國政の中樞に參與できないことを嘆いているのである。

しかし、本來大夫とは、皇帝に近侍する顧問として、國政に參與しうる官職だつたはずである。その大夫が、内朝官か領尙書事にならなければ國政の中樞に關わり得ないとは、如何なることなのか。内朝と尙書は、大夫という官とどのような關係にあるのだろうか。

内朝と尙書については、すでに勞榦氏以下、先學諸氏による研究の蓄積がある。⁽⁴⁶⁾ 紙幅の都合上その學說史を詳述する餘裕はないが、いま、内朝と領尙書事の意義について、筆者なりに要約すると以下になるだろう。

武帝時代に完成した中央集權的な專制支配體制は、官僚機構への統制權を、皇帝一身に集中させるものであつたが、この體制が效果的に機能するか否かは、ひとえに皇帝個人の力量如何にかかつてくるものであつた。これは、卓越した能力を持つ武帝の在位中には、さほど問題とならなかつたが、その死後、幼少の昭帝の即位とともに表面化した。かかる困難な局面に對應するために出現したのが、領尙書事霍光を中心とする内朝である。すなわち、内朝とは、巨大化した官僚機

構に對する、皇帝の支配權力を輔翼・強化するために、侍中・給事中等の、加官という手段によって創出された、新たな側近官僚群のことである。その加官という方法の便宜性の故に、内朝には、從來のような公卿か近侍の臣かという枠を超えて、官僚機構のあらゆる部分から人材を集中することが可能であった。⁽⁴⁷⁾

内朝の意義が右の如くであるとなると、前漢後半期の、大夫と内朝との關係は次のように考えられるだろう。

前漢前半期においては、皇帝と公卿との關係が必ずしも密接ではなく、政府を統御するために、皇帝は當時の唯一の側近たる大夫に頼らざるを得なかった。しかし、前漢後半期、内朝の成立により、大夫のみが唯一の側近ではなくなり、必然的に、大夫の側近・ブレーン・トラストとしての重要性は、相對的に低下せざるを得なかったのである。⁽⁴⁸⁾しかし、内朝官、例えば給事中を加官された者の本官についてみると、光祿大夫等の大夫である場合が、壓倒的に多く、これは、大夫たることが、内朝という新たな側近官僚群に加わるための十分條件ではないにせよ、必要條件としては、最も重要なものの一つであったことを意味する。大夫の側近としての重要性低下を、あくまで相對的なものとする所以である。

一方で、武帝以來の、大夫の集議における役割は、依然として重要であった。『漢書』卷七六王章傳には、

（章）稍や遷りて諫大夫に至り、朝廷に在りては敢えて直言するを名とす。

とあり、諫大夫王章が、朝廷において直言を以て知られたことを記す。また、『漢書』卷三六劉向傳には、元帝初期に信任された周堪と劉向が、宦官弘恭と石顯と對立し失脚した後に、復官した時のことを次のように記す。

（元帝）は堪・向を徵して、以て諫大夫となさんと欲するも、恭・顯は白して皆な中郎となす。

すなわち、弘恭と石顯は、周堪と劉向が諫大夫として復官することに反對し、結局、兩者は中郎に任じられたのである。諫大夫と中郎は、ともに光祿勳所屬の皇帝近従の臣で、その官僚豫備員としての機能も同じく、また、その地位も諫大夫は秩比八百石で、中郎の秩比六百石ときほど異ならない。唯一點、諫大夫は集議への參加資格を有するが、中郎には基本的にその資格がない、ということが大きな相違である。周堪と劉向は、俱にもとは元帝の信任を受けた人物であり、これ

と對立する弘恭と石顯にとつて、彼らに諫大夫として集議參加資格を持たせることは、非常に都合の悪いことだったのであろう。劉向傳のこの記事は、當時の集議における大夫の重要性を物語るものである。

また、官僚豫備員としての大夫については、『漢書』卷七八蕭望之傳（前掲）に、宣帝時代における、諫大夫の郡國守相への轉出が記される外に、『漢書』卷八六王嘉傳中の王嘉の上奏文中には、

今（＝哀帝時）の諸大夫に材能ある者は甚だ少し。宜しく豫め成就す可き者を畜養すべくんば、則ち士は難に赴くもその死を愛します。事に臨みて倉卒にして乃ち求むるは、朝廷を明らかにする所以には非ざるなり。

とある。大夫の官僚豫備員としての機能が、強く意識されていたことを窺わせる。

以上、前漢後半期の大夫は、皇帝のブレントラストとしては、内朝の出現により、その機能は相對的にはやや低下しはしたが、その集議における發言權、官僚豫備員としての機能は、重要視されていたのである。

c、王莽時代および後漢

前漢後半期における大夫の機能充實は、前項でみたとおりだが、その反面、先に引いた王嘉の上奏中に、「今の諸大夫に材能ある者は甚だ少し」とあるように、すでに、その質の低下が問題となっていたようである。これと平行してであろうか、前漢末期、哀帝以降には、大夫という官職が形骸化しつつあった。『漢書』卷九三佞幸傳には、哀帝時代の大司馬董賢とその父の衛尉董恭について、

是の時、賢は年二十二、三公となると雖も、常に中に給事し、尚書を領し、百官は賢に因りて事を奏す。父恭は宜しく卿位に在るべからざるを以て、徙りて光祿大夫となす。

とあり、『漢書』卷八二傳喜傳も、

（喜）右將軍に遷る。……傳太后の始めて政事に與るに、喜は數々これを諫む。是れ由り傳太后は喜をして輔政せし

むるを欲せず。……喜に黄金百斤を賜い、將軍の印綬を^{なだまつ}上らしめ、光祿大夫を以て養病せしむ。

と哀帝時代のことを記す。ここでみると、董恭と傅喜は、ともに國政の中樞から排除される形で光祿大夫に就いている。かかる人事は、光祿大夫が列侯にも比される、名譽職的な性格を有していたからだが、前漢後期の内朝の出現による、大夫の相對的な重要性低下と考え合わせると、やはり、大夫の形骸化が進みつつあったとせざるを得ない。

さらに、王莽時代になると、大夫の形骸化は急速に進んだと考えられる。その原因としては、第一に、大夫の活動の場たる集議の權威低下がある。第二に、王莽による大夫の改制が擧げられる。既にみたように、王莽時代には、太中大夫と諫大夫の官秩は比二千石に上げられ、同じく比二千石の中散大夫が新設された。王莽の官制改革の背景には、官職増設により人心を繋ぎとめる意圖があったとされる。⁽⁴⁹⁾大夫の改制も、おそらくは同一線上にあったと考えられるが、それだけに却って、大夫という官は輕視されるようになったのではあるまいか。

王莽の時に、劉氏の郡太守の任にある者が諫大夫に徙されたことは既に述べた。これは、篡奪に不満を持ったであろう劉氏を、諫大夫として長安に集めることで、地方における劉氏の勢力を削ぎ、同時に、彼らを監視・懷柔するためであろう。かかる措置から、當時の諫大夫が、政治に影響し得ない官となっていたことが窺われる。元帝時代に弘恭・石顯が、政敵周堪・劉向が諫大夫となるのを恐れた事例とは、全く對照的である。これは、諫大夫以外の大夫にもあてはまる。

やがて、王莽が倒れ後漢が建國されたが、大夫の制度に關しては、王莽時代を繼承した。後漢における大夫をめぐる状況は、どの様なものだったのだろうか。『後漢書』傳五一黃瓊傳には、

桓帝は大將軍梁冀を褒崇せんと欲し、中朝二千石以上をしてその禮を會議せしむ。特進胡廣・太常羊溥・司隸校尉祝恬・太中大夫邊韶等、威な冀の勳德を稱す。

とあり、後漢でも大夫が集議に参加したことは確認できる。しかし、後漢においても、王莽時代と同じく集議は輕視されたから、大夫の集議への参加も重視するわけにはいかない。また、『後漢書』には、大夫が皇帝のブレントラストとし

て、際立った活動をしたとの記録もみえない。それどころか、後漢後半期、外戚擅權の甚だしい時期に、これに對抗するために、皇帝が協力を仰いだのは、大夫ではなく、後宮に仕える宦官であつた。後漢において大夫は、ブレイントラストとして殆ど機能していなかったのである。

では、官僚豫備員としての大夫は如何。確かに、後漢の大夫も多くは、やがて中央・地方の二千石クラスの官職へと遷つており、一見、官僚豫備員としては充分機能しているようである。しかし、これを人材登用という面からみた場合、次のように考えられる。

後漢の大夫の官秩が全て比二千石となつたことは、大夫就任が、前漢の太中大夫・諫大夫の如く、秩比六百石の關門を越えるための方途ではなくなつたことを意味する。これは、前漢においては幾つかみられた、制科對策により大夫となる例が、後漢では皆無となる原因の一つであらう。⁽⁵⁰⁾すなわち、後漢の大夫の官秩は、人材登用という點からすれば高くなりすぎたのである。且つ、同じ秩比二千石の前漢の光祿大夫と、後漢の大夫とを比較すると、秩千石以下の官から大夫に遷つた例が、前者では六八人中二人(三二%)なのに對して、後者では一〇三人中一六人(一六%)となる(末尾表3)。

後漢の大夫が、人材登用という點で、前漢の光祿大夫に比べてさへ、劣つてゐることが明らかとなる。この裏返しとして、大夫在任中に死去・歸老した者の比率でみると、前漢の光祿大夫が九二人中七人(八%)であるのに對して、後漢の大夫は一〇八人中二〇人(一九%)となる(末尾表2)。⁽⁵¹⁾後漢の大夫が、老齡・疾病等により政務に堪えられぬ者が就任する官、という性格を持ち始めていることを示す數字である。後漢の大夫は、官僚豫備員とはいえ、人材登用と連動した積極的な意義を持つものではなく、消極的にしか機能しなかつたのである。

以上、王莽時代から後漢時代は、大夫の機能が形骸化してゆく過程だと言えるだろう。

第二章 光 祿 勳

前章においては、漢代光祿勳の屬官のうち、未だ專論のない大夫について論じた。これは「はじめに」でも述べたように、従来の郎吏に關する研究だけでは、光祿勳という官署全體の機能を考える上では不充分だとの認識に基づくものであった。前章での知見から、郎吏・大夫という官僚豫備員を配下に擁する光祿勳は、單に宮殿警護を掌るのみならず、漢代官僚機構における人材供給源としての役割を擔っていたのではないかとの想定が可能となる。以下、本章では光祿勳の機能とその變遷について考察する。

第一節 郎中令から光祿勳へ

百官表では、光祿勳は漢初には郎中令という名稱であり、大夫はこの郎中令||光祿勳に屬すとされている。しかし、既にみたように秦代において大夫は中大夫令に屬していた。秦から漢にかけて、大夫が中大夫令から郎中令||光祿勳へと移管されたこと、および郎中令が光祿勳と改稱されたことには、郎中令||光祿勳という官署の機能を考える上で、重要な意味があると考えられる。

秦代、大夫は中大夫令に屬していたが、このとき中大夫令は、郎中令とともに衛尉の屬下にあった。⁽⁵³⁾漢代になると、郎中令は衛尉から獨立したが、一方の中大夫令はというと、百官表に、

衛尉は秦官、宮門衛屯兵を掌る、丞あり。景帝初め名を更め中大夫令となす、後元年^(前一四三)復た衛尉となす。

とあることから、景帝初めまでは、おそらく衛尉に屬していたのではないかと考えられる。⁽⁵⁴⁾従って大夫は、景帝初年までは衛尉屬下の中大夫令に、景帝後元年までは衛尉から改稱された中大夫令に屬していたのである。大夫が郎中令に移管されたのは、景帝後元年に、中大夫令が再び衛尉と改められたときで、同時に中大夫令が廢され、大夫は郎中令に直屬する

ようになったのであろう。⁽⁵⁵⁾

ついで、武帝元狩五年（前一二八）に、それまでの太中大夫・中大夫に加えて、諫大夫が新設される。諫大夫設置の理由について明言した史料は、管見の限り見あたらないが、『初學記』卷一二には、諫大夫について「名儒宿徳爲之」とあり、⁽⁵⁶⁾衛宏『漢舊儀』（前掲）には、諫大夫が茂材明經科から選ばれたとある。諫大夫就任の條件が、儒學を修めたことだとすれば、次のようには考えられないだろうか。元狩五年（前一二八）の諫大夫新設は、建元五年（前三六）の五經博士設置・元光五年（前三〇）の孝廉科創設・元朔五年（前一二四）の博士弟子設置等の、一連の儒學官學化政策の一環である、と。試みに、諫大夫就任者の経歴を調べてみると、太中大夫や中大夫（太初元年以降は光祿大夫）に比べて、儒學を修めた者の割合が高いことが明らかとなる。⁽⁵⁷⁾すなわち諫大夫は、武帝時代の儒學官學化という状況を背景として、特に經學に明らかな人材を皇帝のブレントラストとして、また官僚豫備員として登用するために新設されたのである。

さらに、武帝太初元年に、郎中令が光祿勳と改稱されたのに伴い、中大夫（秩比八百石）は光祿大夫（秩比二千石）へと改稱・増秩された（以下、單に光祿大夫の設置とする）。これも、その理由については史に明文が無い。しかし、降って成帝時代の事例だが『漢書』卷八六師丹傳には、

（師丹）出て東平王太傅となる。丞相（翟）方進・御史大夫孔光、丹の論議深博にして廉正守道なるを擧ぐ。徴されて入りて光祿大夫、丞相司直となる。數月にして復た光祿大夫を以て給事中たり。

とある。師丹は、東平王太傅（秩比二千石）から、丞相・御史大夫の推薦により中央に徴召され、光祿大夫を経て丞相司直（秩比二千石）となり、ついで給事中として再び光祿大夫となっている。⁽⁵⁸⁾このように、二千石クラスにある者を大夫として中央に徴する場合、例えば秩比千石の太中大夫では、地位が低すぎ、従って光祿大夫に任じられたのであろう。光祿大夫が設置された武帝太初元年頃は、前漢において中央集權的な官僚機構がほぼ完成し、それに伴い、官僚の數も増大しつつある時期で、大夫の官僚豫備員としての機能も、益々重要なものとなっていたと思われる。こうした状況に對應して、二

千石クラスの官僚をブレントラストとして、また官僚豫備員として、待機させておくために設置されたのが、秩比二千石の光祿大夫なのである。

右の如き、中大夫令からの大夫の移管、諫大夫・光祿大夫の設置、という措置を経て、景帝以前に既に官僚豫備員たる郎吏を擁していた郎中令は、景帝から武帝にかけての時期、官僚機構に對する官僚の供給源という點で、その重要性を飛躍的に高めた。そして、その結果として、武帝太初元年の郎中令から光祿勳への改稱があるのだと考えられる。

第二節 光祿勳という名稱

郎中令は武帝太初元年に光祿勳と改稱されたが、この光祿勳なる名稱は、一見しただけでは語義を明確にし難い。⁽⁵⁹⁾ 本節では、光祿勳という官名の意味するところを考えたい。

まず『漢書』百官表の顔師古注には、

應劭曰く、光は明なり、祿は爵なり、勳は功なり。如淳曰く、胡公は「勳の言うところは閹なり」と曰う。閹は古の門を主る官なり、光祿は宮門を主る。師古曰く、應説、是なり。

とあり、顔師古は應劭・如淳の兩説を引いた上で、應劭説を支持している。⁽⁶⁰⁾ 一方、如淳の引く胡廣説は、百官志二劉昭注補には次のように引かれている。

胡廣曰く、勳は猶お閹のごときなり、易に曰く「閹寺となす」と、宦寺は殿宮門戸を主るの職なり。

如淳・胡廣は、光祿勳の「勳」を「閹寺」、すなわち宮門を掌る官の意味だとするのである。また、王先謙『漢書補注』には、何焯『義門讀書記』の、

何焯曰く、當に如説に従うべし。勳は讀みて閹なり、今の閹越閒に猶おこの音あり。下に「中大夫を更めて光祿大夫となす」とあり、亦た以て宮門内に在るのみ。

との説が引かれ、同じく王先謙『後漢書集解』には、惠棟『續漢志補注』卷二四にみえる、「勳」は「蕪」と同じであり又た「閭」に通じる、との説が引かれている。いずれの條にも、王先謙自身の案語は附されていないが、恐らくは何焯・惠棟と同意見なのであろう。

すなわち、應劭・顔師古は「光||明、祿||爵、勳||功」、胡廣・如淳・何焯・惠棟・王先謙は「勳||閭」とするのである。なお、胡廣以下も、應劭説のうち「光||明、祿||爵」の部分には異説を立てていないから、この訓詁は動かぬであろう。では、「勳」の訓詁は「功」なのか「閭」なのか。

應劭説では、「光祿勳」は「明爵功」であり、少々形式的に言えば、語の構成としては「光+祿勳」となると思われる。しかし、光祿大夫という官名をみると、「光祿」が一つの要素を成しており、また、後の梁代には、光祿勳は勳字を省かれ、光祿卿と改稱されている⁽⁶¹⁾。よって、光祿勳という語の構成は「光祿+勳」でなければならず、この點で應劭説は成立しがたく、「勳||閭」とする胡廣以下の説に従うべきであろう。

かくして、「光祿勳」という官名には、「明爵閭」という訓詁が與えられることになる。ところで、武帝以降においても、光祿勳が宮殿警護を掌る官署であり續けたことは、郎中令と呼ばれていたときと變わりはない。従って、光祿勳すなわち「明爵閭」という名稱のうち、「勳||閭」が、宮門警護というその具體的な職掌を意味すること、胡廣の説のとおりである。一方の「光祿||明爵」の意味するところについては、次節で述べたい。

第三節 光祿勳の機能

大夫と郎吏という官僚豫備員を屬下に擁する光祿勳が、漢代官僚機構において、官僚の供給源として機能していたと考えられることは、既に述べた。ここで、郎中令が光祿勳と改稱され、これに伴い秩比二千石の光祿大夫が設置された武帝太初元年における、光祿勳の主な屬官の構成と官秩を、『漢書』百官表により一覽すると、次のようになる。

光祿大夫——比二千石
 中郎將——比二千石
 太中大夫——比千石
 郎中將——比千石
 謁者僕射——比千石
 諫大夫——比八百石
 中郎——比六百石
 議郎——比六百石
 謁者——比六百石
 侍郎——比四百石
 中郎——比三百石

こうしてみると、光祿勳の屬官は、上は最高クラスの比二千石から、下はいわゆる敕任官では最低クラスの比三百石までの、各階層に涉つて設置されている。これを、大夫・郎吏の有する官僚豫備員としての機能と考え合わせると、次のように言えるだろう。

すなわち、太初元年の時點で光祿勳は、官僚機構において缺員が生じた場合に、隨時對應できるように、大夫・郎吏等を豫め比二千石から比三百石までに序列化し、常に待機させておき、しかる後、その序列に従い各官署へと供給する、という實に整然たる機能を有する官署として完成したのである。しかし、それ以前の郎中令なる名稱は、それ自體では、宮殿警護官たる郎吏を監督する官、という以上のことを意味せず、太初元年前夜の段階では、その實態と名稱は必ずしも一致していない。新たに採用された光祿勳という名稱の「光祿」すなわち「明爵」とは、官僚豫備員の官秩（＝爵）を序列

化（＝明らかに）する、という機能を表現したものであり、ここにおいて、宮殿警護と官僚供給源という二つの側面を持つ官署の「名が正された」のである。

右の如き光祿勳の機能は、前漢時代には有効に作用していたが、王莽時代を経て後漢へと至る間に、徐々に低下していったと思われる。その理由としては、第一に、既にみた大夫の機能低下があり、第二に、先學も指摘する、辟召制の盛行の背景にある、官僚豫備員としての郎吏の價值低下が挙げられる。⁽⁶²⁾

おわりに

以上、考察してきたことを要約すると、次のようになる。

- 一、大夫は、皇帝のブレイントラストとして、前漢前半の皇帝權力の強化に大きな役割を擔った。前漢後半においては、内朝の出現によって、その機能は相對的に低下したが、内朝官の母胎としては依然重要であった。
- 二、同時に、大夫は官僚豫備員として、官僚が秩比六百石を越えて昇進していく上での、重要な一階梯であった。
- 三、右の大夫の機能は、王莽時代を経て後漢に至る間に、徐々に低下していった。
- 四、従来、單に宮殿警護を掌るとされていた光祿勳は、それ以外に、郎吏・大夫という官僚豫備員を序列化し、待機させておく機能を有していた。光祿勳という名稱のうち、「光祿」とはこの序列化の側面を表し、「勳」とは宮殿警護の側面を意味する。

三國時代以降、大夫は全く形骸化した名譽職となり、光祿勳もまた唐代に至る過程で、郎吏・大夫がその屬下から離れてゆき、徐々に重要性を失い、唐代に至り單に「酒醴膳羞」を掌るのみの官となってしまう。⁽⁶⁴⁾しかし、前漢武帝時代に完成した光祿勳の官僚序列化という機能は、形骸化しつつも後世に影響を與えている。すなわち、唐代の文散官——文官の

官品、序列のみを表す官——は、全て某々大夫、某々郎という名稱がつけられているという事實がそれである。無論、唐代の文散官は、六朝時代における紆餘曲折を経て成立したもので、漢代の大夫・郎吏とは直接の繼受關係は無いと考えられるが、そこに、前漢武帝時代に一つの頂點に達した中國古代官僚制度の、後世への影響の一端を垣間みることは充分可能であろう。

註

- (1) 漢代中央政府の諸官署についての研究としては、日本では、和田清編著『支那官制發達史』上冊（中央大學出版部 一九四二）、のち汲古書院 一九七三（復刻）の第二章「秦漢時代」（櫻井芳朗執筆）、大庭脩「漢王朝の支配機構」（同著『秦漢法制史の研究』創文社 一九八二、初出は『岩波講座世界歴史』四 岩波書店 一九七〇）があり、中國では、陶希聖・沈巨塵『秦漢政治制度』（上海商務印書館 一九三六）、安作璋・熊鐵基『秦漢官制史稿』上下（齊魯書社 一九八四・八五）、楊鴻年『漢魏制度叢考』（武漢大學出版社 一九八五）がある。
- (2) 光祿勳は、武帝太初元年（前一〇四）に改稱されるまでは郎中令といったが、本稿では、特に時代的背景を考慮する必要のないかぎり、光祿勳の名稱を用いる。なお、第二章において、前漢前半における光祿勳の變遷を論ずるときには、便宜的に「郎中令」光祿勳」とする場合がある。
- (3) 嚴耕望「秦漢郎吏制度考」（同著『嚴耕望史學論文選集』臺北 聯經出版事業公司 一九九一、初出は『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三本上冊 一九五一）、增淵龍夫「戰國官僚制の一性格」（同著『新版中國古代の社會と國家』岩波書店 一九九六、なお本書の舊版は弘文堂 一九六〇刊、また論文の初出は『社會經濟史學』第二一卷第三號 一九五五）。
- (4) 安作璋・熊鐵基『秦漢官制史稿』上（註（一）前掲）では一〇七頁以下の光祿勳の條でごく簡単に觸れられている。また、楊鴻年『漢魏制度叢考』（註（一）前掲）では、「大夫」として一項を立てて、より詳細に論じてはいるが、大夫を光祿勳との關係において考察する視點は希薄である。
- (5) なお、漢代では「大夫」という語には大略三つの用法があった。その一は爵名で、二十等爵中には大夫・官大夫・公大夫・五大夫等の名稱がみえる。その二は官位に關わるもので、官秩六百石から千石までの官僚の身分を「位大夫」と稱していた。そしていま一つが官職名で、本稿が對象とする光祿勳の大夫や、副丞相たる御史大夫がある。以下、本稿において單に大夫とある場合は、いうまでもなく光祿勳の大夫のことである。
- (6) 段志洪『周代卿大夫研究』（臺北 文津出版社 一九九四）

第一章「有關卿大夫的幾個問題」、および吉本道雅「春秋國
人考」(『史林』第六九卷第五號 一九八六)、同「春秋世族
考」(『東洋史研究』第五三卷第四號 一九九五) 参照。

(7) 『呂氏春秋』季夏紀。

是月也、令四監大夫合百縣之秩芻、以養犧牲(高誘注。
四監、監四郡大夫也)。

(8) 『離騷』王逸章句。

屈原名平、與楚同姓、仕於懷王、爲三閭大夫、三閭之
職、掌王族三姓、曰昭・屈・景。

(9) 『漢書』百官表。

御史大夫、秦官(注。應劭曰、侍御史之率、故稱大夫
云)。

(10) 『左傳』によれば、大夫の身分には、上下もしくは上中下
の別があったとされる。段志洪『周代卿大夫研究』第一章

「有關卿大夫的幾個問題」(註(6)前掲) 参照。なお、『禮
記』王制に、

王者之制祿爵、公・侯・伯・子・男、凡五等、諸侯之上
大夫卿・下大夫・上士・中士・下士、凡五等(鄭玄注。
上大夫曰卿)。

とあるのに従えば、上大夫とは、則ち諸侯國の卿のことであ
る。

(11) 『史記』卷六秦始皇本紀・秦王政九年條。

長信侯嫪毐作亂而覺……、王知之、令相國昌平君・昌文
君發兵攻毒、戰咸陽……、毒等敗走……、盡得毒等、衛
尉竭・內史肆・佐弋竭・中大夫令齊等(正義。令力政

反、中大夫令、秦官也、齊、名也)、二十人皆梟首。

(12)

勞幹「秦漢九卿考」(『勞幹學術論文集中編』臺北 藝文
印書館 一九七六、初出は『大陸雜誌』一五一・一一 一九五
七) 参照。秦代の大夫について、『宋書』卷三九百官志上に
は「光祿大夫、秦時爲中大夫」、『通典』卷三四職官一六に
は、「太中大夫、秦官、亦掌論議、漢因之」「中大夫、秦
官」とある。また、『初學記』卷一二には、

按諫議大夫、秦官也、齊職儀云、初秦置諫議大夫、屬郎
中令、無常員、多至數十人、掌論議。漢初不置、至武帝
始因秦置之、無常員。皆名儒宿德爲之。隸光祿勳。光武
增議字、爲諫議大夫、置三十人。屬光祿勳。

とあるが、秦代の大夫が郎中令に属していたとする點で、や
や疑問である。なお、『隋書』卷三三經籍志二によれば、

(13)

大夫が宮中で君主に近侍していたことに關しては、やや時
代が降るが、『漢書』卷三九曹參傳に、次のような惠帝時代
の記事がある。

參子窋爲中大夫、惠帝怪相國(曹參)不治事……、窋
既洗沐歸、時間、自從其所諫參、參怒而答之二百、曰趣
入侍、天下事非乃所當言也。

(14)

楊寬『戰國史』增訂第三版(臺北 臺灣商務印書館 一九
九七)第六章第四節「加強統治的有關制度創設」参照。

(15)

『史記』卷四六田齊世家・集解。
劉向別錄曰、齊有稷門、城門也、談說之士期會於稷下
也。

(16) このことは、本章第五節で詳述する前漢前半期の大夫の活動からも遡って類推しうる。

(17) 本章第五節参照。

(18) 集議については、永田英正「漢代の集議について」(『東方學報京都』第四三冊 京都大學人文科學研究所 一九七二) 参照。以下、集議に言及する場合は永田氏の論考により、一々ことわらない。なお、集議の参加者は時により、必ずしも一定していないが、史書にみえる集議の記録からは、多くの場合に大夫が含まれることがわかる。

(19) 漢代の使者については、大庭脩「後漢の將軍と將軍假節」(註(1)前掲『秦漢法制史の研究』、初出は「漢代の節について——將軍假節の前提——」の題で『關西大學東西學術研究所紀要』二 一九六九) 参照。

(20) 同様の例としては、『漢書』卷四三陸賈傳の次の記事がある。

孝文即位、欲使人之南越。丞相(陳)平乃言賈爲太中大夫、往使(南越王)尉佗。

(21) 西域都護については、勞幹「漢代的西域都護與戊己校尉」(註(12)前掲『勞幹學術論文集甲編』、初出は『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二八本上冊 一九五六) 参照。また、『漢書』卷七〇段會宗傳に、

竟寧中、以杜陵令・五府學爲西域都護・騎都尉・光祿大夫、西域敬其威信。

とあり、諫大夫だけでなく、光祿大夫にも西域都護が加官される場合があったことがわかる。

(22) 地方の状況を観察するために大夫が派遣された例は、『漢書』『後漢書』本紀中に頻見し、枚舉に遑がない。

(23) 『北堂書鈔』卷五六に引く韋昭『辨釋名』には、「太中大夫、在中最爲高大者也」とある。また、『資治通鑑』漢紀六文帝前三年條で胡三省が、「中大夫……其位在太中大夫之下、諫大夫之上」と注するのに従うべきである。

(24) 古川朋信「兩漢時代の百官秩祿制度に就いて」(『東洋史會紀要』第二冊 東洋史會 一九三七) 参照。

(25) 太初元年の中大夫から光祿大夫への改稱・増秩は、元狩五年以降の、同じ秩比八百石に中大夫と諫大夫が併存するという状況を解消するための措置と考えることができる。『續漢書』百官志二の劉昭注に、

胡廣曰く、光祿大夫は本は中大夫たり。武帝元狩五年、諫大夫を置きたれば、光祿大夫となす。

とあるのも、その傍證となろう。なお、中大夫の光祿大夫への改稱・増秩の原因はこれだけではない。詳しくは本章第五節で後述する。

(26) 『漢書』卷一〇成帝紀。

(陽朔二年) 夏五月、除吏八百石・五百石秩(注。李奇曰、除八百就六百、除五百就四百)。

(27) 『隋書』卷二八經籍志二には、「漢官五卷、應劭注」とあるのみだが、應劭は後漢末の人だから、『漢官』の後漢時代以前の成書は明らかである。なお、『隋書』經籍志では、應劭撰『漢官儀』十卷とは區別されているので、別書と思われる。

(28)

『東觀漢記』のこの條に記された官秩は、『續漢書』百官志の記載と異同がある場合が多く、これが、建武初年の舊制と考えられる理由の一端である。詳しくは、吳樹平校注『東觀漢記校注』（中州古籍出版社 一九八七）參照。

(29)

『漢書』卷九十九中王莽傳中。

始建國元年……、更名秩百石曰庶士、三百石曰下士、四百石曰中士、五百石曰命士、六百石元士、千石下大夫、比二千石曰中大夫、二千石曰上大夫、中二千石曰卿。

(30)

『周禮』夏官・庠人條。

庠人掌十有二閑之政教、……散馬耳、圉馬（注。鄭司農云、……散讀爲中散大夫之散。孫詒讓正義。段玉裁云、中散大夫、蓋對大中大大夫言之、中大夫之閑散者、次於中大夫之大者也）。

(31)

ここに記されるのは、嚴密に言えば官秩ではなく、おそらく朝會における班位のことであろうが、官秩と班位の間には、ある程度の對應があるものと考えられる。ちなみに、ここに列擧された官の官秩は、次のとおり。車騎將軍は「公に比す」（百官志一）とされる。五校尉とは、屯騎・越騎・步兵・長水・射聲の五校尉のこと、官秩は比二千石（百官志四）。博士は秩比六百石で、議郎は秩六百石（いずれも百官志二）となる。

(32)

「徙」の用例としては次のものがある。

『漢書』卷三十六劉德傳。

昭帝初、（德）爲宗正丞、雜治劉澤詔獄、父（＝辟疆）

爲宗正、徙大鴻臚丞。

『漢書』卷七十六韓延壽傳。

（延壽）遷淮陽太守、治甚有名、徙潁川（太守）……、數年、徙爲東郡太守。

(33)

『通典』卷二職官三。

後漢、增諫大夫爲諫議大夫。

および註（12）前掲『初學記』參照。

(34)

ここに名を擧げられた者たちの、武帝に近侍した際の官職をみると、嚴助——中大夫、朱買臣——待詔・中大夫、吾丘壽王——待詔・中郎・太中大夫、司馬相如——郎・中郎將、主父偃——郎中・謁者・中郎・中大夫、徐樂——郎中、嚴安——郎中、東方朔——待詔公車・待詔金馬門・常侍郎・太中大夫、枚皋——待詔・郎、膠倉——不明、終軍——謁者・諫大夫、嚴葱奇——常侍郎、となる。十二人中六人が大夫となり、その他も郎中・待詔となっている。なお、待詔については、杉本憲司「漢代の待詔について」（『大阪府立大學社會科學論集』四・五 一九七三）參照。

また、師古注に「外謂公卿大夫也」とある「大夫」とは、本稿「はじめに」で述べた「官秩六百石から千石までの官僚」のことで、光祿勳の大夫のことではない。

(35) 加藤繁「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並びに帝室財政一斑」（同著『支那經濟史考證』上 東京 東洋文庫 一九五二）參照。

(36)

『漢書』卷六十四上嚴助傳。

助爲中大夫、……、於是拜爲會稽太守。數年不聞問、

(武帝)賜書曰、制詔會稽太守、君厭承明之廬、勞侍從之事、懷故土、出爲郡吏(注。張晏曰、承明廬在石渠閣外、直宿所曰廬)……。

『漢書』卷八八儒林傳注。

師古曰、三輔故事云、石渠閣在未央宮北、以藏祕書也。

(37) 『漢書』卷七十二鮑宣傳。

宣以諫大夫從其後、上書諫曰……、陛下擢臣嚴穴、誠冀有益毫毛、豈徒欲使臣美食太官、重高門之地哉(注。晉灼曰、高門、殿名也。師古曰、在未央宮中)。

なお、ここでも「美食太官」と、諫大夫鮑宣が太官令から食を受けていたことが記されている。

(38) 福井重雅「漢代官吏登用制度の研究」(創文社 一九八八)第三章第二節「官僚制度と官秩」参照。

(39) 永田英正「後漢の三公にみられる起家と出自」(『東洋史研究』第二四卷第三號 一九六五)参照。

(40) なお、大夫が、かかる性格を有していたのは、前漢に限ったことで、後漢においては状況が變化する。次節で詳述する。

(41) 『漢書』卷六八霍光傳。

(鄂邑)公主內行不修、近幸河間丁外人。(上官)桀・

(上官)安欲爲外人求封、幸依國家故事以列侯尙公主者、光不許。又爲外人求光祿大夫。

『漢書』卷七九馮奉世傳。

前將軍(韓)增舉奉世、以衛侯使持節送大宛諸國客。……諸國悉平、威振西域。……上(宣帝)甚說、下議

(42)

封奉世、丞相・將軍皆曰……奉世功效尤著、宜加爵土之賞。少府蕭望之獨以奉世奉使有指、而擅矯制違命……奉世不宜受封。上善望之議、以奉世爲光祿大夫。

『漢書』卷四八賈誼傳。

(誼)至太中大夫。誼以爲漢興二十餘年、天下和洽、宜當改正朔、易服色制度、定官名、興禮樂。乃草具其儀法、色上黃、數用五、爲官名悉更。奏之、文帝謙讓未皇也。然諸法令所更定、及列侯就國、其說皆誼發之。於是天子議以誼任公卿之位、絳・灌・東陽侯・馮敬之屬、盡害之、乃毀誼曰、雒陽之人年少初學、專欲擅權、紛亂諸事。於是天子後亦疏之。

『漢書』卷四九鼂錯傳。

(錯)遷中大夫。錯又言宜削諸侯事、及法令可更定者、書凡三十篇、孝文雖不盡聽、然奇其材。當是時、太子善錯計策、爰盎諸大功臣多不好錯。

『漢書』卷六四上主父偃傳。

偃數上疏言事、遷謁者・中郎・中大夫、歲中四遷。偃說上(武帝)曰、……願陛下令諸侯得推恩分子弟、以地侯之、彼人人喜得所願、上以德施、實分其國、必稍自銷弱矣。

(43)

『漢書』卷六四上嚴助傳。

建元三年、閩越舉兵圍東甌、東甌告急於漢。時武帝年未二十、以問太尉田蚡。蚡以爲越人相攻擊、其常事、又數反覆、不足煩中國往救也、自秦時棄不屬。於是助詰蚡曰、……上曰、太尉不足與計、吾新即位、不欲出虎符

發兵郡國。乃遣助以節發兵會稽。

(44) なお、『漢書』卷九〇酷吏傳には、

(趙禹) 至中大夫、與張湯論定律令、作見知、吏傳相監
司以法、盡自此始。

とある。

(45) 『漢書』卷四六石奮傳には、

奮積功勞、孝文時、官至太中大夫、無文學、恭謹、學無
與比。

とある。また、衛青も、その軍事的才能は後の對匈奴戰にお
いて明らかとなるが、太中大夫への就任は、『漢書』卷五五
衛青傳には、

子夫(『青の姉、後の衛皇后)爲夫人、青爲太中大夫。

元光六年、拜爲車騎將軍、擊匈奴。

とあるのみで、軍事的知識によるものではなく、姉の入内に
伴うものであろう。

(46) 勞幹「論漢代的內朝與外朝」(註(12)前掲『勞幹學術論文

集甲編』上冊 初出は『歷史語言研究所集刊』第一三本 一
九四八)、増淵龍夫「漢代における國家秩序の構造と官僚」

(註(3)前掲『新版中國古代の社會と國家』、初出は「一橋
論叢」二八—四 一九五二)、西嶋定生「武帝の死—『鹽鐵

論』の政治史的背景—」(同著『中國古代國家と東アジア世
界』東京大學出版會 一九八三、初出は『古代史講座』學生

社 一九六五)、鎌田重雄「漢代の尙書官—領尙書事と錄尙
書事を中心として—」(『東洋史研究』第二六卷第四號

一九六八)、富田健之「前漢武帝期以降における政治構造の

一考察—いわゆる內朝の理解をめぐる—」(『九州大學東

洋史論集』九 一九八一)、同「內朝と外朝—漢朝政治構造

の基礎的考察—」(『新潟大學教育學部紀要』第二七卷第二
號 人文・社會科學編 一九八六)、同「漢時代における尙

書體制的形成とその意義」(『東洋史研究』第四五卷第二號

一九八七)、藤田高夫「前漢後半期の外戚と官僚機構」(『東

洋史研究』第四八卷第四號 一九九〇) 参照。

(47) 勞幹「論漢代的內朝與外朝」(註(46)前掲)では、內朝官

のひとつである給事中が、あらゆる官に加官されたことが指
摘される。

(48) 藤田高夫「前漢後半期の外戚と官僚機構」(註(46)前掲)

参照。

(49) 河地重造「王莽政權の出現」(『岩波講座世界歷史』四

岩波書店 一九七〇) 参照。

(50) 後漢の制科對策において被察學者は、ほとんどの場合、比
六百石の議郎に補任されている。福井重雅「漢代官吏登用制

度の研究」(註(38)前掲)第二章第五節「察舉と對策の高
第」参照。

(51) 三國以降の大夫について、『晉書』卷二四職官志は、次の
ように記す。

光祿大夫假銀章青綬者、……魏氏已來、轉復優重、不復
以爲使命之官。其諸公告老者、皆家拜此位。

(52) 百官表で大夫・郎吏とともに、光祿勳の屬官として擧げら
れた謁者も、また同様に官僚豫備員として機能していたの
はないかと推測されるが、残念ながら、今は、これを詳しく

検討する紙幅がない。

- (53) 勞榦「秦漢九卿考」(註(12)前掲)では、秦代においては、郎中令・中大夫令はともに秩千石以下で、衛尉所屬の官であるとされる。圖示すると次のようになる。

衛尉 \swarrow 郎中令——郎吏
中大夫令——大夫

- (54) 衛尉の官名改稱に際して、その屬官たる中大夫令の官名を冠すというのは、少々不思議ではあるが、少なくとも、衛尉から全く獨立した官の名稱を用いるよりは、あり得る状況かと思われる。従って、勞榦が「秦漢九卿考」(註(12)前掲)において、「中大夫令」職漢時廢去」とするのは誤りであり、また、「漢世無中大夫令、諸大夫屬於郎中令」とするの、景帝以前に關して言えば誤解であらう。後述するように、大夫が郎中令に屬すようになるのは、景帝後元年以降であらう。

- (55) 以上の經緯を圖示すると、次のようになる。

・景帝初年以前

衛尉——中大夫令——大夫

郎中令——郎吏

・景帝初年—景帝後元年

中大夫令——大夫

(本の衛尉)

郎中令——郎吏

・景帝後元年以降

郎中令 \swarrow 大夫
郎吏

- (56) 註(12)前掲『初學記』參照。

- (57) 漢初から宣帝時代までの大夫就任者のうち、儒學を修めた者の割合は次の如きである。

・諫大夫——一七人中一三人(七七%)
・太中大夫——二一人中五人(二四%)
・中大夫——九人中四人(四四%)
・光祿大夫——一八人中五人(二七%)

諫大夫に關して、特に比率が高いことが確認できる。なお、宣帝時代を以て下限としたのは、諫大夫設置當初の状況をより正確に反映させるためである。元帝以降には、官界にもかなり儒學が浸透しており、諫大夫だけでなく、光祿大夫・太中大夫および他の官職についても、儒者の比率は高くなっていると思われる。

- (58) 同様の例としては次のものがある。

・周堪——元帝時代に、光祿勳から河東太守に左遷されたのち、再び徵されて光祿大夫・領尙書事となる
(『漢書』卷三六劉向傳)。

・尹忠——廷尉から、成帝建始二年に諸吏・左曹・光祿大夫となり、翌年、御史大夫となる(『漢書』卷一九下百官表下)。

- (59) 大庭脩氏は「漢王朝の支配機構」(註(1)前掲)第二節「官名改稱の持つ意味」において、太初元年の官制改革の結

果登場した、京兆尹・執金吾・光祿勳・大鴻臚等の從來とは全く異質な、意味の取りにくい官名には、その背景に受命改制の思想があると推測されているが、それぞれの名稱自體の意味するところについては、「にわかには結論が得られそうもない」として、判断を保留しておられる。

(60) ここに引かれた應劭説とは、應劭『漢官儀』の記述の節略であり、孫星衍輯本を『太平御覽』・『初學記』などにより校訂すると、次のようになる。

光明也、祿爵也、勳功也、言光祿典郎・謁者・虎賁・羽林、舉不失德、賞不失勞、故曰光祿勳。

また、如淳のいう胡公とは胡廣のこと、『隋書』卷二八經籍志二に「漢官解詁三篇、漢新汲令王隆撰、胡廣注」と著録

された『漢官解詁注』の佚文であろう。

(61) 『通典』卷二五職官七・光祿卿。

後漢曰光祿勳……、有獄在殿門外、謂之光祿外部。……

梁除勳字、謂之光祿卿。

(62) 永田英正「後漢の三公にみられる起家と出自」(註(39)前

掲)および同「漢代の選舉と官僚階級」(『東方學報京都』

第四一冊 京都大學人文科學研究所 一九七〇) 參照。

(63) 註(51)前掲『晉書』職官志。

(64) 『大唐六典』卷一五光祿寺條。

(65) 宮崎市定『九品官人法の研究―科舉前史―』(『宮崎市定

全集』六 東京 岩波書店 一九九二、初出は東洋史研究會

一九五〇) 參照。

表2 大夫からの遷轉

	前 漢				後 漢			
	光祿大夫	太中大夫	中 大 夫	諫 大 夫	光祿大夫	太中大夫	中散大夫	諫議大夫
三 公	10	1	1		8	7		
諸 將 軍	6	4	1		1			1
中二千石	26	6		2	9	2		
二 千 石	8	3		2	3	2		
比二千石	7	4	1	10	4	8	2	5
郡國守相	17	5	6	10	4	5	1	4
免・誅殺	10	6		4	2	2		1
卒・歸老	7	2		3	6	6	2	6
そ の 他	1	3		8	2	5		10
合 計	92	34	9	39	39	37	5	27

* 表3と合計人数が異なるのは、官歴不明者を除外したためである。

** 三公とは、丞相・御史大夫・大司馬・太尉・司徒・司空の總稱。

*** 郡國守相には、郡都尉・州牧を含む。

表3 大夫就任直前の官

	前 漢				後 漢			
	光祿大夫	太中大夫	中 大 夫	諫 大 夫	光祿大夫	太中大夫	中散大夫	諫議大夫
三 公	(1)				(8)	(5)		
將 軍	2(2)				1	(1)	1	
中二千石	4(2)				5(1)	5(1)	1	1
二 千 石	3			(1)				
比二千石	6	1		(2)	4	(1)	1	2
郡國守相	8(4)	2	(1)	(5)	3	11(1)	1(1)	6(1)
縣 令	2	1	(1)	2(3)		1		1
御 史	1	2	1		1			
刺 史		3		2	1(1)			1
博 士	4	2		2				
大 夫	3	(1)						
郎 吏	5	5	1	13	1			3
千 石	5	1			4			1
六 百 石	1	2	2	2		1		1
そ の 他	15	7	1	8	6	9	1	8
合 計	68	27	7	40	36	36	6	25

* 表2と合計人数が異なるのは、官歴不明者を除外したためである。

** () 内の数字は、故その官であったことを示す。

*** 郡國守相には、郡都尉・州牧を含む。

GUANG-LU-XUN 光祿勳 AND DA-FU 大夫 IN THE HAN DYNASTY

YONEDA Takeshi

As is generally known, in the Han period, lang-guan 郎官 was not only a bodyguard of the emperor, but held an important position, as a candidate for the official, under the official recruitment system. Although, hitherto, guang-lu-xun 光祿勳, to which lang-guan belonged, has been merely considered a superintendent of guards for the imperial palace. It is necessary to examine the relation of guang-lu-xun to the official recruitment system.

In the first chapter of this paper, prior to guang-lu-xun, I examine the role played by da-fu 大夫, which was another subordinate official of guang-lu-xun. In the second chapter, I give light on the role of guang-lu-xun in the bureaucracy of the Han dynasty. My conclusions are as follows:

Da-fu was the counselor of the emperor and, especially in the first half of the former Han, was extremely helpful to strengthening the authority of the emperor. At the same time, similar to lang-guan, da-fu played an important role as a candidate for the official. However, after Wang Mang period, in the later Han, da-fu had gradually lost these roles.

Guang-lu-xun, which held candidates for officials, lang-guan and da-fu, was not only a superintendent of guards for the imperial palace, but also a source of the official supply to the bureaucracy of the Han dynasty. The title of 'guang-lu-xun' indicates the roles of itself: 'guang-lu' means the role of supplying the officials to the bureaucracy, 'xun' means the role of guard for the imperial palace.